

加納宣康（監修）

三毛牧夫（著）

正しい膜構造の理解からとらえなおす
ヘルニア手術のエッセンス

執行友成

医療法人社団涼友会東京ヘルニアセンター・執行クリニック院長

副題として「正しい膜構造の理解からとらえなおす」とあり、流行の腹腔鏡下ヘルニア修復術の著書かな？ と思い読ませていただきました。まず基礎編では、言葉の定義から始まり、胎生期の腸回転による膜構造の図解など、正しい臨床解剖について解説されており、日常臨床として鼠径ヘルニアを専門として外科治療を行っている私にとって基本に帰ることのできる流れには感嘆の一言です。腹腔鏡手術が主流になりつつある昨今は、どこから切開をすれば正確な手術が可能であるかの判断をできない中堅・若手が横行する可能性があり、切開線の重要性和皮膚縫合の重要性をご教示いただける内容となっています。

応用編の「A. 鼠径ヘルニア」のセッションでは、引き込まれるように一気に読破できる明解な臨床解剖がひととき印象的であり、すぐに役に立つ、そして熟練の外科医がハッとする著書と感じました。

私とはアプローチの手法は少し異なりますが、「A-IX-11. 精索内から

のヘルニア囊の剝離分離」の段はぜひとも読者にはもう一度理解をしていただきたいところだと思います。p 46に「内精筋膜（横筋筋膜の続き）とヘルニア囊（腹膜の続き）との間には、腹膜下筋膜浅葉と深葉が存在するはずである。この浅葉と深葉の間に精管・精巣動静脈が存在する。したがって、精索内にヘルニア囊が存在するときはその分だけ精索が分厚くなっている」とあります。私のアプローチは著者とは違い、一気に精索をヘルニア囊と一緒に挙上はしませんが、前方から挙上筋を走行に沿って分離をすると、その下方には必ず内精筋膜、浅葉が存在します。そこで精巣動静脈は深葉を残しつつヘルニア囊を分離すれば、おのずから残った物がヘルニア囊であり、その剝離層を内鼠径輪へ向かって行けば簡単に前腔へ到達でき、直下には下腹壁動静脈が露出されます。本書の明解な腹膜前筋膜の解説は、無駄な操作と過剰な剝離をせずに深葉をヘルニア囊（腹膜の続き）につけたまま、前腔に到達できることを示さ

れており、これまでになかったより臨床的なヘルニア囊の剝離・分離の素晴らしい解説書であると思います。私の弟子たちにうまく伝えることができなかった解剖を一気にご説明いただけたことに感動しました。このような解剖の知識は腹腔鏡下手術でも全く同様の基本的事項であり、万人が共有すべきことです。

「C. 腹壁ヘルニア」の解説で特筆すべきはp 106の図98です。「腹壁ヘルニア修復術におけるメッシュ位置の定義と表現」についてあらためて整理整頓されており、外科医としての基本的事項を再確認させていただきました。

鼠径ヘルニアをはじめとしたヘルニアの解説書は多く出ておりますが、本書は臨床を重視した著書として、一読ではなく必読すべきものと感じました。

●A4/頁 212/2014 年

定価：本体 9,000 円＋税

[ISBN978-4-260-01927-9]

医学書院 刊